

甲南女子大学図書館蔵 松林靖明文庫調査報告

山 上 登 志 美
米 田 明 美
高 寺 直 子

序

平成二十八年四月、甲南女子大学学長であった松林靖明先生が、ご逝去になった。先生は優れた国文学研究者でもあった。軍記文学の研究業績は数多く、中でも研究が遅れていた室町・戦国軍記の研究において先生が果たされた役割は非常に大きい。

生前、先生は軍記を中心に多くの和書を収集されていた。その数は、一七三点、一二〇〇冊を超える。更にこれらの和書は、江戸時代に書写された写本が多く、貴重なものも見受けられる。先生の遺品でもあるこの和書群は、先生の奥様によって甲南女子大学図書館に寄贈され、「松林靖明文庫」として所蔵されることとなった。今回、約二年間の時間をかけ、新潟大学名誉教授鈴木孝庸先生のご指導のもと、「松林靖明文庫」の整理・分類・調査を行った。作業には松林先生の教え子である野見山重沙美氏・竹内彩氏の協力も頂いた。その調査結果を以下に報告する。

凡例

(1) 一 取り扱う内容によって「A『平家物語』『太平記』」「B『義経記』『曾我物語』とその周辺」「C 室町軍記とその周辺」「D 戦国軍記とその周辺」「E その他」に分類した。「D 戦国軍記とその周辺」は更に「I 織田信長の抬頭」「II 豊臣

秀吉の全国制覇」「III 徳川家康の覇権争奪」「IV 武将記・家記」「V 通史・年代記」「VI 夜話・逸話集」に分類した。分類にあたっては『戦国軍記事典』（古典遺産の会編 和泉書院刊）を参考にした。

二 通常、呼称されている書名を見出しとして掲げ、その訓みを（ ）内に示した。見出しと松林靖明文庫本の書名（内題を優先）が異なる場合は、【 】内に訓みとともに示した。

三 書名の下には、冊数及び巻数、写本刊本の別を記した。欠巻がある場合は、注記した。また書写年・刊年が明らかな場合は、これも記した。

四 旧字体は原則として現在使用されている字体を用いた。

A 『平家物語』『太平記』

1 『平家物語評判秘傳抄』（へいけものがたりひょうばんひでんしょう）二三冊（全二四巻だが、巻十一下欠）刊本

流布本『平家物語』十二巻をそれぞれ上下に分けて、各章段の概略を記したものに、「伝曰」や「評曰」として論評を加えたもの。

2 『新刻 太平記』（しんこく たいへいき）二二冊（巻一〜四〇）刊本
巻頭に「剣巻」を有する。

3 『頭書増補絵本太平記』（とうしよぞうほえほんたいへいき）一冊（剣巻のみ）

絵入り刊本

明治十六年(一八八三)三月、東京同益出版社発行。

(高寺)

B 『義経記』『曾我物語』とその周辺

1 『義経記』(きけいき) 八冊(八巻) 写本《写真①②》

義経の『平家物語』での武将としての活躍ぶりを補うように、平治の乱に敗北した源義朝の子として育った不遇な生い立ち、平氏追討後の兄頼朝との対立、奥州平泉の高館での自刃という悲劇的な末路について重点的に描いた伝記物語。本書は、各冊の通し番号として、「八卦」の「乾」・「兌」・「離」・「震」・「巽」・「坎」・「艮」・「坤」の字が当てられている。また、『義経記』には、『判官物語』系統および流布本系統の写本の二種類があるが、本書は、内容および形式から後者の本文を持つ伝本である。

2 『義経記』(同) 一冊(巻三のみ) 絵入り刊本

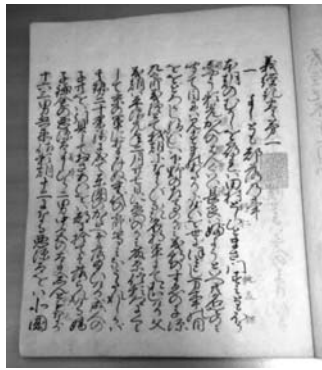
『義経記』巻三では、弁慶の話を載せる。本書は、表紙に「武蔵房弁慶」と、墨書きがある。十四行。

3 『天狗之内裏遇言語』(てんぐのだいりくうげんかたり) 一冊(一十一段) 慶応二年(一八六六)写

源義経の鞍馬山中修行伝説を素材としてつくられた御伽草子。



写真①



写真②

4 『曾我物語』(そがものがたり) 三冊(全十二巻のうち、巻一、九、十二が存) 寛文三年(一六六三)刊 絵入り版本

建久四年(一一九三)五月に起きた、曾我十郎祐成・五郎時致兄弟が父親の仇である工藤祐経を討った事件を題材にした軍記物語。

5 『曾我物語』(同) 四冊(全十二巻のうち、巻二、三、五、八が存) 絵入り版本

6 『曾我物語』(同) 二冊(全十二巻のうち、巻三、四が存) 絵入り版本

B5 『曾我物語』と同じ版か。

7 『曾我物語』(同) 一冊(全十二巻のうち、巻二が存) 絵入り版本

8 『曾我物語』(同) 一冊(全十二巻のうち、巻六が存) (高寺)

C 室町軍記とその周辺

1 『永享記』(えいきようき) 一冊(一卷) 寛文七年(一六六七)写《写真③④》

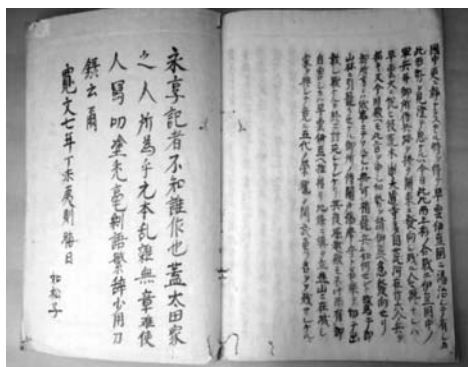
永享十年(一四三八)に起こった永享の乱と続く結城合戦を描く軍記。『永享記』諸本は収録する章段によって五系統に分類されるが、松林本は「憲実出家事」から「早雲蜂起事」の十三の章段を収めていて、この五系統には当てはまらない。現在確認されている『永享記』諸伝本にはない形をとることで注目される。内題の「永享記」の下に「一名 道灌記」と見える。なお、蔵書印はC2『長祿記』と同じ、また奥書から、伝記や戦記の収集で知られる「如松子」(福住道祐)が旧蔵していたことが確認できる。

2 『永享記』(同) 一冊(全十二巻のうち、巻二が存) 絵入り版本

3 『永享記』(同) 一冊(全十二巻のうち、巻六が存) (高寺)



写真③



写真④

2 『長祿記』(ちようろくき) 一冊(一巻) 万治二年(一六五九)写《写真⑤⑥》

長祿年間から文正年間(一四五七～一四六六)に起こった畠山氏の内紛を描いた軍記。『長祿記』には簡略型の本文を持つ伝本と文芸的な記述を持つ伝本の二種類があるが、松林本は後者の本文を持つ。また、『長祿記』伝本に多く見られる「文明十四

年仲春下旬写本云々 河内若江城守祐全」という奥書も有する。「萬治二年巳亥五月十五日考之 松山庄右衛門友春所写也 如松子」という記述から、C1『永享記』と共に福住道祐の所蔵であったらしい。

3 『桜雲記』(おううんき) 一冊(上中下三巻)写本

後醍醐天皇即位から南北朝の争乱、南北朝合一を経て、長祿三年(一四五九)に赤松家の残党が南朝の新帝を害し神璽を奪う事件までを編年的に描いた軍記。江戸時代前期の成立で、作者は徳川家光に仕えた浅羽成儀と推測されている。

4 『桜雲記』(同)二冊(中下二巻)宝暦九年(一七五九)写

「朽木文庫」の蔵書印があり、江戸時代の旗本朽木家が所蔵していた写本である。

5 『応仁記』(おうにんき) 二冊(上下二巻)寛永十年(一六三三)刊

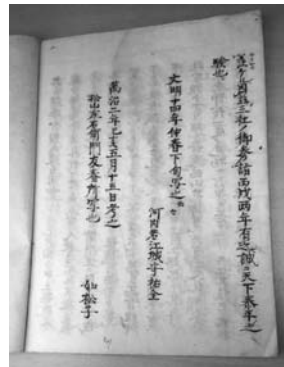
応仁の乱を描く軍記。江戸時代には『承久記』『明德記』とともに「三代記」と称せられた。『応仁記』には一巻本・二巻本・三巻本が知られているが、松林本は三巻本より先出とされる二巻本である。

6 『重編応仁記』(じゅうへんおうにんき) 二〇冊(巻一～二〇)文政六年(一八一三)刊

応仁の乱を中心に戦国時代の合戦まで描いた軍書。宝永年間(一七〇四～一七一〇)に成立、作者は小林正甫。「応仁前記」「応仁広記」「応仁後記」「続応仁後記」



写真⑤



写真⑥

から成る。

7 『野馬台詩余師』(やまたいしよし) 一冊(一巻)天保十四年(一八四三)刊

『野馬台詩』の注釈書。「論語」などの四書をはじめ多くの経籍に注釈を附して出版された『經典余師』シリーズの中の一冊。『野馬台詩』は九世紀初頭に中国から伝来したとされる予言書。日本の終末を予言した未来記とされ、様々な解釈が加えられた。『応仁記』の中には、冒頭に『野馬台詩』とその注釈を載せるものがある。

8 『野馬台詩国字抄』(やまたいしこくじしょう) 一冊(一巻)天保九年(一八三八)刊

『野馬台詩』の注釈書。

9 『野馬台文』(やまたいぶん) 一冊(一巻)写本

『野馬台詩』の注釈書か。

10 『鎌倉大草子』(かまくらおおぞうし) 一冊(一巻)写本

康暦元年(一三七九)から文明十一年(一四七九)までの、主に鎌倉公方と管領に関わる関東各地の戦闘を描いた軍記。松林本は『史籍集覧』所収本の上中下巻のうち、中巻にあたる部分を持たず、上巻と下巻の巻も分けない。

11 『宗像軍記』(むなかたぐんき) 一冊(一巻)写本

筑前国宗像大宮司家の一族の軍記。(山上)

D 戦国軍記とその周辺

DI 織田信長の抬頭

1 『桶狭間軍記』(おけはざまぐんき) 三冊合本(上中下三巻)刊本

桶狭間の戦いを描く読本。江戸末期から明治初期にかけて、川中島の戦いや山崎合戦などを題材とした読本が、山口屋藤兵衛を板元とする三冊仕立ての体裁で次々と刊行されており、その一つと考えられる。作者は禁多楼仙果、色刷の挿絵は一梅斎芳春の画である。

2 『石山軍鑑』(いしやまぐんかん) 六十冊(前編三十巻 後編三十巻)写本

信長と本願寺の戦いを描く軍記。当時の本願寺は現在の大坂城がある石山にあつ

たため、この戦いを石山合戦と呼ぶ。明和八年(一七七二)、立耳軒著。

3 『石山軍記』(いしやまぐんき)一冊(上下二巻)写本

『石山軍鑑』を『石山軍記』とも称する。『石山軍記』の抄出本。章段名はない。

4 『石山軍鑑』(同)一冊(一巻)嘉永六年(一八五三)写

『石山軍記』の「信長石山攻評定并羽柴秀吉諫言之事」以下の九章を抜書したものの。

5 『石山軍記』(同)【大坂石山軍記(おおさかいしやまぐんき)】一冊(上下二巻)写本

『石山軍記』の抄出本。

6 『石山軍記談』(いしやまぐんきだん)一冊(第一回〜十五回)大正三年(一九一四)刊

「布教百家叢書」の第五編。大富秀賢編。西村護法館発行。石山合戦を題材とした小説。

7 『明智物語』(あけちものがたり)一冊(一巻)写本

明智氏の発祥から明智光秀の横死までを描く。

8 『天正軍談』(てんしょうぐんだん)三冊(二巻)文久三年(一八六三)写

秀吉と明智光秀が戦った天王山の戦い等、戦国時代の合戦談を集めたものか。

(山上)

DⅡ豊臣秀吉の全国制覇

1 『太閤記』(たいこうき)十冊(巻一〜二二)刊本

秀吉の一代記。作者は小瀬甫庵。寛永二年(一六二五)の序を持つ。

2 『太閤真蹟記』(たいこうしんけんき)二二〇冊(全十二編三六〇巻)写本(写真⑦)

江戸時代に流行した秀吉に関する軍談講釈を小説化した実録。秀吉の誕生から死までを描く。大部の作品であり、現存する伝本で全編揃っているものは多くなく、松林本は貴重な伝本である。ただし、第三冊の最終章「斎藤道三信長に対面の事并武蔵守信行誅せらるる事」に写し間違いがあり、末尾が欠けていることが惜しま

れる。

3 『太閤真蹟記』(同)六一冊(全十二編

三六〇巻のうち、第七編巻一・巻三、第十二編巻一は欠)文政二・三年(一八一九・二〇)写

4 『太閤真蹟記』(同)九冊(全十二編三六〇巻のうち、初編巻一〜十二・巻十九〜三〇、第二編巻一〜三〇が存)写本

5 『太閤真蹟記』(同)七冊(全十二編三六〇巻のうち、第二編巻四〜六、第四編巻十〜十二、第九編巻十三〜十五、第十編巻十三〜十五、第十一編巻二五〜二七、第十二編巻十〜十二・二二〜二四が存)写本

6 『太閤真蹟記』(同)【改撰実録増補太閤真蹟記(かいせんじつろくぞうほたいこうしんけんき)】十三冊(全十二編三六〇巻のうち、初編巻一〜六・十三〜十八・二五〜二七・三〇、第三編巻四〜十二・十六〜二四・二八〜三〇が存)写本

『太閤真蹟記』の一部を抄出したものか。

7 『写本太閤記』(しゃほんたいこうき)二八冊(七編八四巻)安政六年(一八五九)写

内題を「太閤真蹟記」とするが、『絵本太閤記』の本文を書写したものか。

8 『真書太閤記』(しんしよたいこうき)七二冊(全十二編三六〇巻)天保四年(一八三三)写

外題・内題ともに『真書太閤記』とするが、本文は『太閤真蹟記』に近い。『太閤真蹟記』には『真書太閤記』と称する伝本もある。

9 『真書太閤記』(同)十三冊(全十二編三六〇巻のうち、第三編巻二二、第六編巻三・四、第十編巻三・二八、第十二編巻三・四・九〜十一・十五・二九・三〇が存)写本

秀吉の江戸時代最後の一代記。栗原柳庵編著。



写真⑦

- 10 『真書太閤記』(同) 九冊(全十二編三六〇巻のうち、第四編巻一〜六、巻十〜三〇が存) 写本
- 11 『太閤真蹟記』(同) 【真蹟太閤記(しんけんたいこうき)】 十三冊(全十二編三六〇巻のうち、第二編巻一・三〜五・七〜十、第四編巻一〜九・十六〜十八・二二〜二四・二八〜三〇が存) 写本
- 12 『繪本太閤記』(えほんたいこうき) 七七冊(全七編八四巻のうち、第六編巻六〜十二が欠) 写本
秀吉の絵入りの一代記。武内確斎著。『太閤真蹟記』等の実録写本に依拠し、挿絵を入れたもの。寛政九年(一七九七)から享和二年(一八〇二)に刊行されたが、文化元年(一八〇四)に幕府から絶版を命じられた。
- 13 『太閤昇進録』(たいこうしょうしんろく) 一冊(二巻) 安政四年(一八五七) 写
『太閤記』二六〇巻を要約したものか。
- 14 『無双昇進録』(むそうしょうしんろく) 十一冊(不明) 写本
江戸時代の太閤物の一作品か。
- 15 『天正軍談山崎合戦』(てんしょうぐんだんやまざきかっせん) 三冊(上中下三巻) 写本
信長を討った明智光秀と秀吉が戦った山崎合戦(天王山の戦い)を描く軍記。
- 16 『賤ヶ嶽合戦』(しずがだけかっせん) 四冊(巻一〜四) 写本
秀吉と柴田勝家が滋賀県の賤ヶ嶽付近で戦った賤ヶ嶽の戦いを描く軍記。
- 17 『長久手記』(ながくてき) 一冊(一巻) 写本
秀吉と家康・織田信雄(信長二男)が戦った小牧長久手の合戦を描く軍記。
- 18 『遠州長久手戦記』(えんしゅうながくてせんき) 一冊(一巻) 写本
『四戦紀聞』の第四巻『尾州長久手戦記』と同じものか。
- 19 『豊臣鎮西軍記』(とよとみちんぜいぐんき) 十冊(巻一〜三〇) 写本
秀吉の九州平定までの経緯を、武将等の逸話で記述する通俗的な作品。(山上)

D III 徳川家康の覇権争奪

- 1 『慶長最上陣』(けいちょうもがみじん) 一冊(一巻) 写本
慶長五年(一六〇〇)の上山・長谷堂合戦を描いた軍記。
- 2 『岡崎物語』(おかざきものがたり) 一冊(上中下巻) 写本
家康の一代記。上巻は、家康幼時から遠江に進入していた武田の軍勢を追い払った天正九年(一五八二)高天神城の戦いまでを描く。中巻は、天正一〇年(一五八二)から慶長四年(一五九九)までの記録。下巻は、慶長五年(一六〇〇)の会津征伐から元和二年(一六一六)の家康の薨去までを書き留める。
- 3 『參河後風土記 初編後編』(みかわごぶどき しょへんこうへん) 二二冊(巻一〜四五) 写本
徳川氏の遠祖の系譜から筆を起す。序文に「慶長十五年寅戌五月吉日平岩主計頭親吉日記」とあり、家康の直臣平岩親吉による『三河後風土記』の類か。
- 4 『三河後風土記荃葉集』(みかわごぶどきけいようしゅう) 十三冊(巻一〜二二) 写本
- 5 『三川後風土記精細集書』(みかわごぶどきせいさいしゅうしよ) 十八冊(巻四〇〜五八、巻四三欠) 写本
- 6 『松平啓運記』(まつだいらけいいうんき) 一冊(一巻) 写本
書名が類似しているものに、『松平崇宗啓運記』(まつだいらすうそうけいいうんき)、『松平啓運録』(まつだいらけいいうんろく)、『啓運記』(けいいうんき)、『松平崇宗開運記』(まつだいらすうそうけいいうんろく)がある。
- 7 『関ヶ原大全』(せきがはらたいぜん) 二八冊(巻一〜三一、巻一・十一・二十七欠) 写本
慶長五年(一六〇〇)の関ヶ原合戦の顛末を記したもの。石田三成の拳兵に筆を起し、合戦で勝利し天下平定を導いた徳川氏を称揚して筆を置く。
- 8 『関ヶ原軍記』(せきがはらぐんき) 五冊(巻一〜巻十五、巻十三・十四・十五欠) 文政一二年(一八二九) 写
- 9 『関ヶ原大全』(同) 十七冊(巻一〜六二) 明治三年(一八七〇) 写
末尾に「山本充至写之」とある。「兵書曰」として、関ヶ原発端の事から説き明

- かし、慶長十年(一六〇五)に秀忠が征夷大将軍の宣下を受けるまでを記す。
- 10 『関ヶ原軍記』(同)七冊(巻一〜三)文化十四年(一八一七)写
- 11 『大坂物語』(おおさかものがたり)二冊(上下巻)宝暦六年(一七五六)写
慶長十九年(一六一四)・二〇年の大坂の陣を記録した軍記。巻末に「首長」を付記することから、『大坂物語』整版本を写したものが。
- 12 『難波戦記』(なんばせんき)六冊(巻一〜六)写本
大阪の冬の陣と夏の陣を記録した軍記。寛文十二年(一六七二)三宅可参の序を有する。
- 13 『難波戦記』(同)十二冊(巻二〜十四、巻一、十三、十五欠)天保十年(一八三九)写
- 14 『難波戦記』(同)十冊(巻一〜五)写本
- D III 12 『難波戦記』と同じく三宅可参による序文有り。布陣図入り。
- 15 『難波戦記』(同)二冊(巻十五〜十六、二三)文政七年(一八二四)写
- 16 『難波戦記』(同)十冊(巻一〜二〇)安永三年(一七七四)写
- 17 『難波戦記大全』(なんばせんきたいぜん)二冊(巻一〜二〇)
本書は、田丸具房(常山)が補注した伝本。
- 18 『難波戦記大全』(同)一冊(巻一〜十二)写本
- 19 『浪華戦記大全実録』(なにわせんきたいぜんじつろく)九冊(巻一〜三〇のうち、巻五、六、十一、十二欠)写本
大阪冬の陣(一六一四)と夏の陣(一六一五)について、他の軍記および家伝によって評注を加えたもの。
- 20 『浪華戦記大全実録』(同)十冊(巻一〜三〇)写本
- 21 『難波冬夏軍記』(なにわふゆなつぐんき)一冊(巻一〜三)写本
- 22 『厭蝕太平楽記』(えんしよくたいへいらくき)六冊(巻一〜六)写本
大阪の陣の真田幸村を題材にした軍記。
- 23 『厭蝕太平楽記』(同)十五冊(巻一〜三〇)写本
- 24 『厭蝕太平記』(えんしよくたいへいき)十五冊(巻一〜三〇)写本
- 25 『於安女話』(おあんじよばなし)一冊(一巻)昭和四二年(一九六七)刊
- 石田三成に仕えていた山田去暦(上野)の体験をまとめた軍記。
- 26 『四戦紀聞』(しせんきぶん)四冊(巻一〜四)弘化三年(一八四六)刊
家康が関わった合戦でも特に重要な姉川合戦(二五七〇)、三方原合戦(一五七三)、長篠合戦(一五七五)、長久手合戦(二五八四)のそれぞれの経緯を記した軍記。根岸直利編集、木村高敦校正。
- 27 『四戦紀聞』(同)三冊(巻一〜四)写本
- 28 『校正四戦紀聞大全』(こうせいしせんきぶんたいぜん)十冊(巻一〜十六)写本
- 29 『実録薩琉軍談』(じつろくさつりゅうぐんだん)二冊(巻一〜六)文久三年(一八六三)写 慶長十四年(一六〇九)、島津氏による琉球征伐に関する記事。
- 30 『嶋津琉球軍談』(しまづりゅうきゅうぐんだん)二冊(上下巻)写本
- 31 『嶋津琉球軍精記』(しまづりゅうきゅうぐんせいき)五冊(巻一〜二)写本
- 32 『嶋原記』(しまばらき)一冊(上下巻)写本
寛永十四年(一六三七)に起こった島原の乱の軍記。
- 33 『天草軍記』(あまくさぐんき)四冊(巻一〜三〇)写本
島原の一揆に続いて勃発した天草の一揆の顛末を記す。
- 34 『天草軍記』(同)十冊(巻一〜二)写本
- 35 『御記録金ヶ先寄退口合戦』(ごきろくかねがさきのきぐちかつせん)一冊(一巻)安政六年(一八五九)写
元亀元年(一五七〇)、信長が越前朝倉氏を攻略中に、近江浅井氏の離反に遭って退却した合戦の記録。
- 36 『徳川將軍録』(とくがわしやうぐんろく)一冊(巻一〜十五)写本
慶長六年(一六〇二)から寛永二〇年(二六四三)までの徳川將軍に関する編年体の記録。
- 37 『慶安記聞書』(けいあんきききがき)五冊(巻一〜五)写本
- 38 『今古実録慶安太平記』(きんこじつろくけいあんだいへいき)三冊(上中下巻)明治十五年(一八八二)刊
- 39 『慶安前秘録』(けいあんぜんひろく)一冊(一巻)写本

40 『慶安太平記』(けいあんたいへいき) 五冊(巻一〜十)寛政元年(一七八九)写

慶安四年(一六五二)に起きた慶安事件(由井正雪の乱)をもとに、巷説や風説などを交えて実録風の小説としてまとめたもの。

41 『慶安太平記』(同) 十冊(巻一〜十)写本

42 『慶安賊説弁』(けいあんぞくぜつべん) 四冊(巻一〜十)文化十一年(一八一四)写 (高寺)

DIV武將記・家記

1 『最上義光物語』(もがみよしあきものがたり)【義光物語(よしあきものがたり)】二冊(上下二巻)文化十年(一八一三)写

東北の戦国武將最上義光の一代記。作者は最上家の遺臣である。

2 『最上義光物語』(同)【義光物語(同)】二冊(上下二巻)文政十三年(一八三〇)写

3 『最上義光物語』(同)【義光物語(同)】一冊(二巻)写本

『最上義光物語』上巻の二章段と下巻の一章段を抜き書きしたもの。

4 『最上義光物語』(同)【義秋物語(同)】二冊(上下二巻)写本

5 『最上義光物語』(同)一冊(上下二巻)写本

6 『最上義光物語』(同)【最上義光公一代記(もがみよしあきこういちだいき)】一冊(一巻)写本

『最上義光物語』上巻の九章段を抜き書きしたもの。

7 『会津資料叢書』(あいづしりょうそうしよ) 二冊(巻一・三)大正六年(一九一七)刊

8 『伊達実録』(だてじつろく) 一冊(巻一〜十四)写本

江戸時代前期に起こった仙台藩のお家騒動である伊達騒動を描いた作品。

9 『天正十三年十一月十七日仙道人取橋御合戦之図』(せんどうひととりばしおんかつせんのず) 一枚 天保十五年(一八四四)写《写真⑧⑨》

天正十三年(一五八五)、福島県の人取橋付近で伊達政宗と佐竹氏等が戦った人

取橋の戦いを描く合戦地図。

10 『春日山日記』(かすがやまにつき) 五冊(巻一〜三〇)写本

上杉謙信の語録や軍法を中心とした一代記。

11 『信州川中島軍記』(しんしゅうかわなかじまぐんき) 一冊(巻一〜三)写本

『川中島五戦記』を抄出したものか。

12 『川中島五戦記』(かわなかじまぐんき) 六冊(巻一〜六)安政二年(一八五五)写

川中島合戦に関する上杉家側の伝承を記したもの。

13 『信州川中島五戦記 評林』(しんしゅうかわなかじまぐんき びょうりん) 一冊(一巻)嘉永二年(一八四九)写

『川中島五戦記』の内容を解説したものか。

14 『武田三代軍記』(たけださんだいぐんき) 二二冊(巻一〜二二)享保五年(一七二〇)刊

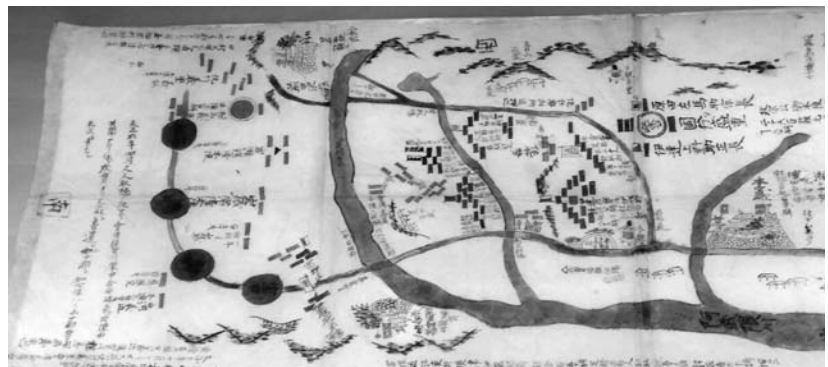
武田信虎・信玄・勝頼の盛衰を記したものの。

15 『信玄関係軍記抜き書き』(しんげんかんけいぐんきぬきがき) 一冊(一巻)慶安四年(一六五二)写

武田信玄関係の合戦をいくつかの軍記から抜き書きしたものか。布陣図を二面有する。



写真⑨



写真⑧

- 16 『真田軍功家伝記 御先祖之事』(さなだぐんこうかでんき ごせんそのこと) 一冊(一巻) 貞享二年(一六八五) 写
- 真田信之(幸村の兄)の戦功をまとめたもの。家康などからの手紙の写しを多く載せる。表紙・装丁の類似から「E6越国内輪弓箭」と同シリーズとも見られる。
- 17 『絵本真田三代記』(えほんさなださんだいき) 一冊(一巻) 明治三六年(一九〇三) 刊
- カラー印刷の絵本。真田幸村の子大助が、大坂城落城の後、豊臣秀頼とともに九州の島津に落ちた、という内容で終わる。
- 18 『臼杵軍記』(うすきぐんき) 一冊(一巻) 写本
- 九州の大友氏の重臣であった臼杵氏の軍記。
- 19 『小幡景憲記』(おばたかげのりき) 一冊(二巻) 寛永十九年(一六四二) 写
- 戦国時代の小幡景憲を主人公とした武将記。景憲は甲州流の軍学者としても知られる。
- 20 『石川正西聞見集』(いしかわしょうさいぶんけんしゅう) 一冊(二巻) 昭和四三年(一九六八) 刊 埼玉県立図書館編
- 松井松平家家老の石川正西が藩主の命令により数十年の見聞をまとめた記録。
- 21 『元和三勇士』(げんなさんゆうし) 七冊(一回〜二五回) 明治二十一年(一八八八) 写
- 福島正則の三人の家臣を主人公にした物語か。(山上)
- D V 通史・年代記
- 1 『室町殿日記』(むろまちどのにつき) 二〇冊(巻一〜二〇) 写本
- 2 『奥羽軍記』(おううぐんき) 一冊(一巻) 写本
- 3 『羽源記』(うげんき) 十冊(巻一〜二〇) 明治二十七年(一八九四) 写 別名『奥羽軍談記』(おううぐんだんき)とも称する。
- 4 『奥羽越後軍記』(おううえつごんりやくき) 一冊(一巻) 写本
- 5 『奥羽軍記』(同) 四冊(巻二〜五) 写本 別名『奥羽軍志』(おううぐんし) 写
- 6 『越後治乱記』(えちごちらんき) 一冊(巻一のみ) 文化二年(一八〇五) 写

- 7 『甲越信戦録』(こうえつしんせんろく) 二冊(上下巻) 大正三年(一九一四) 刊
- 8 『露原拾葉』(ふきはらしゅうよう) 二二冊(巻一〜二二) 昭和十七年(一九四二) 刊
- 信濃国に関する古文書を収集編纂した叢書。中村元恒・元起編。(高寺)
- D VI 夜話・逸話集
- 1 『義残後覚』(ぎざんこうかく) 七冊(巻一〜七) 写本
- 怪談や奇談・笑話などを集めた雑記。実在に人物として秀吉や信長なども登場する。全七巻・八五話を収める。奥書によると、愚軒が文禄五年(一五九六)にまとめたと記すが、実際の成立時代はやや下るか。
- 2 『岩渕夜話』(いわぶちやわ) 十冊(巻一〜十) 写本
- 家康の誕生からその生立ちや軍陣など公私に関する逸話六六話を、年代順に仮名文で記述したもの。全八巻。成立年代は明確ではないが、武蔵国岩淵の宿に住む一人の翁からの聞き取りという形式が書名の由来となっている。大道寺友山(一六三九〜一七三〇)著。大道寺は江戸前中期の兵学者・儒学者で、松平忠輝に仕え、後諸侯に招かれ兵学を講じた人物。一時武蔵岩淵に寄寓しているので、「翁」は著者自身であり、その時期に成立したか。D VI 2〜4 『岩渕夜話』とも巻数の記載は異なるが、内容はほぼ同じ。
- 3 『岩渕夜話』(同) 一冊(天・地・人) 元治元年(一八六四) 写
- 4 『岩渕夜話』(同) 一冊 安永三年(一七七二) 写
- 5 『岩渕夜話別集』(いわぶちやわべつしゅう) 一冊 写本
- 『岩渕夜話』の増補、著者も同じ。
- 6 『武野燭談』(ぶやしよくだん) 二冊(巻一〜三〇) 写本 宝永六年(一七〇九)の序文。
- 慶長から元禄・宝永期における徳川将軍家や御三家、諸大名らの事績や言動に関する逸話を中心に集めた書。三〇巻。
- 7 『落穂集』(おちほしゅう) 八冊(巻一〜十五) 写本

家康の誕生から元和元年（一六一五）の天下統一までを編年体的記事としてまとめたもの。三冊本・七冊本・十冊本・十五冊本など異なる冊数の伝本群があるが、『戦国軍記事典』によると「巻数を明示する伝本もあるが、本来定まった巻序意識があったとは考えられない。書写ないし製本の都合による冊数順の表記によるものが大半であろう。」とする。奥書に「享保十二丁未年冬至日 大道寺知足軒友山八十九歳記之」とあることから大道寺友山の著作であるが、この奥書を伝えない伝本もある。松林本のDVI10『落穂集』はこの奥書を有し、DVI15の『落穂集』扉題にも「大道寺友山撰」とある。享保十二年は一七二七年である。

- 8 『落穂集』(同) 五冊(巻一〜十) 写本
- 9 『落穂集』(同) 五冊(巻一〜十) 写本
- 10 『落穂集』(同) 十四冊(巻一〜十三) 写本
- 11 『落穂集』(同) 八冊(巻一〜十五) 写本
- 12 『落穂集』(同) 八冊(巻八〜十五) 写本
- 13 『落穂集』(同) 二冊(巻一・二) 写本
- 14 『落穂集』(同) 一冊(巻一) 写本
- 15 『落穂集』(同) 一冊(巻一のみ) 写本
- 16 『落穂集』(同) 一冊(巻一のみ) 写本
- 17 『落穂集』(同) 一冊(巻四のみ) 写本
- 18 『落穂集追加』(おちぼしゅうつか) 五冊(巻一〜五) 写本
『落穂集』を基として、家康の江戸開府のころを中心とした様々な話を、付け加えたもの。一〇巻。太田道灌の千代田城築城の話から江戸の町造りや、由井正雪事件、明暦の大火等が中心で、合戦に関する話は少ない。享保十二年(一七二七)大道寺友山著。
- 19 『老人雑話』(ろうじんざつわ) 六冊(巻一〜六) 写本
秀吉の天正期を中心に、室町時代から江戸時代に至るまでの合戦や武将、能や茶道などの諸芸道に至る雑話を収めた書。京都の儒学者・医師江村専斎(一五六五〜一六六四)の口述を、弟子の伊藤垣庵(一六二三〜一七〇八)が筆録し後編集整理したもの。

- 20 『老人雑話』(同) 三冊(上・中・下) 写本 寛永五年(一七〇九)の序文有り。
- 21 『老人雑話』(同) 一冊(乾・坤) 写本 正徳三年(一七二三)の序文有り。
- 22 『武者物語』(むしやものがたり) 一冊(上・下) 写本

各章段の書出し「古き侍の物語曰」が書名の由来と考えられ、源頼政や家康・小早川隆景など武士の逸話を六二話並べる。逸話の後に福島正則の部下佃又右衛門が戦の心構えをまとめた二七首「佃の軍歌」を載せる。

- 23 『武者物語』(同) 一冊(巻二のみ) 刊本
- 24 『謙徳公御夜話』(けんとくこうおんやわ) 一冊 写本
前田重熙の言行録・伝記、天明二年(一七八二)成立。志村識行著。
- 25 『微妙公御夜話』(みみょうこうおんやわ) 一冊 写本
前田利常の記録。享保九年(一七二五)成立。山本基庸著。(米田)

E その他

- 1 『最莊越軍談』(さいししょうえつぐんだん) 【最庄越軍記(さいししょうえつぐんき)】三冊(上・中・下) 写本
- 2 『最莊越軍談』(同) 【同】三冊(上・中・下) 写本 柴山南光著。戦記。
- 3 『千安合戦』(ちやすかつせん) 一冊 写本
千安は今の山形県鶴岡市の千安川流域の十五里ヶ原の地名。一五八八年越後村上城の城、主本庄繁長が、庄内奪還のため最上義光軍に起こした戦い。
- 4 『会津陣軍記』(あいづじんぐんき) 【石田会津軍記(いしだあいづぐんき)】一冊(巻一 巻二〜四欠) 写本 延宝八年(一六八二)序有り。杉原親清著。
- 5 『奥陽軍秘録』(おうようぐんひろく) 七冊(巻一・二・五〜十 巻三〜四欠) 写本
伊達家の戦記。
- 6 『越国内輪弓箭』(こしのくにうちわきゆうせん) 一冊 写本 文化三年(一八〇六)の序有り。
- 7 『越後軍記』(えちごぐんき) 十冊(巻十一 但し巻一・十二はコピー) 刊本
戦記。著者は元禄一五年(一七〇三)の序によると白雲子。

- 8 『田宮物語』(たみやものがたり) 七冊(巻一〜十) 写本
- 9 『大久保武蔵鐘』(おおくぼむさしあぶみ) 五冊(巻一〜二五 綴じ誤りがあり、巻十六の後半と巻十七全部と巻十八前半が欠落) 写本
- 10 『慶元攝戦記』(けいげんせつせんき) 五冊(全四二巻だが、巻一〜六と巻十三〜十八欠) 写本
大阪冬の陣の記録か。
- 11 『兵家紀聞』(へいかきぶん) 五巻五冊 絵入り版本
跋文によると天保十四年(一八四四)自序、弘化四年(一八四七)刊、栗原信充(のぶみつ)一七九四〜一八七〇)著。栗原は柴野栗山に儒学、平田篤胤に国学、屋代弘賢に有職故実を学び、武家の有職に詳しい。雑史。
- 12 『武徳大成記』(ぶとくたいせいき) (巻一〜三〇) 写本
阿部正武(まただけ) (一六四九〜一七〇四) 監修、林鳳岡等編、貞享三年(一六八六)成立。阿部は武蔵国忍藩主で、綱吉時代幕府の中枢におり徳川家の資料収集に努めた。
- 13 『武家統盛衰記』(ぶけぞくせいすいき) 二冊(巻一〜二四) 写本
- 14 『古今武家盛衰記』(ここんぶけせいすいき) 六冊(巻一〜十) 写本
- 15 『武備大要録』(ぶびたいようろく) 三冊(巻一〜三) 写本
『国書総目録』には「武備大要録別伝」はある。兵法書か。
- 16 『一言坂合戦』(ひとことさかかせん) 一冊(巻一) 写本
元龜三年(一五七二)家康と武田軍が一言坂(現在の静岡県磐田市)での合戦記。
- 17 『荒川武勇傳』(あらかわぶゆうでん) 二冊(巻一・二) 写本
- 18 『羽城昔がたり』(うじょうむかしものがたり) 【羽城昔物語】 一冊 写本
高垣猶存著。秋田の佐竹一族の伝記。
- 19 『義臣傳實記』(ぎしんでんじつき) 一冊 弘化三年(一八四九) 写
浅野内匠頭と吉良上野介の松廊下から仇討、その後義士たちの辞世の和歌までを収む。
- 20 『前々太平記』(ぜんぜんたいへいき) 一冊(巻十三のみ) 正徳五年(一七一六) 刊
平住専庵(ひらずみせんあん) 著、戦記。
- 21 『奥平報警實録』(おくだいらほうしゅうじつろく) 一冊(巻一〜五) 写本
- 22 『国家太平記』(こっかたいへいき) 十冊(巻一〜十、巻十一〜二〇欠) 写本
- 23 『祐天御一生』(ゆうてんごいつしゅう) 二冊(巻一・二) 写本
祐海上人(一六三七〜一七一八) 一代記。祐天は綱吉・桂昌院の信望厚く、増上寺三六世を継ぐ。
- 24 『活套』(かっとう) 一冊(一巻) 写本
督宗紹董著、室町末期成立。督宗は大徳寺一〇九世の僧。
- 25 『武藝記』(ぶげいき) 一冊 写本
内題によると『玉露叢』『南留別志』『東雅抄』『要秘録』『文會雜誌』『験基秘書』『折焚叢』七編の随筆の抜書か。
- 26 『西行法師撰集抄抜書』(さいぎょうほうしせんじゅうしゅうぬきがき) 一冊 写本
西行法師の説話を集めた「撰集抄」九卷九冊二二話から抄出した五八話の抜書本か。
- 27 『常夏草紙』(とこなつぞうし) 一冊(巻一〜五) 版本
読本、曲亭馬琴の著 勝川春亭画。文化七年(一八一二) 成立。
- 28 『将門一代記』(まさかどいちだいき) 一冊 絵入り版本 安政二年(一八五五) 成立。仮名垣魯文著、歌川芳直画。平将門の一代記。
- 29 『唐糸草子』(からいとぞうし) 【からいと】 二冊(上・下) 絵入り版本
御伽草子。室町時代成立。木曾義仲の家来手塚光盛の娘唐糸は、義仲に頼まれ源頼朝の命を狙うが露見し捕えられ、尼寺に預けられる。尼公の計らいで脱出するが、再び捕えられ石牢に入れられる。故郷にいた娘の万寿は鎌倉に出向き、鶴岡八幡に祈り、頼朝が今様を謡わせた手弱女の中に加わる。その孝心に感じ入った頼朝は、褒美として母唐糸を許し、母子ともに無事故郷に戻ったという内容。
- 30 『清明通変 秘傳』(せいめいつうへんうらない ひでん) 一冊 貞享三年(一六八六) 版
- 31 『大阪落城 全』(おおさからくじょう ぜん) 一冊 写本
落城前の大阪城内を舞台にした春本。(米田)

Konan Womens' University Library Yasuaki Matsubayashi Book Collection:
A Survey Report

YAMAGAMI Toshimi, YONEDA Akemi and TAKATERA Naoko

Key Words: Professor Yasuaki MATSUBAYASHI, the Warring States period